伏見城の造営

前田　義明

1．はじめに

伏見城は幻の城といわれることがあるが、それは城郭部分が徹底的に破壊され、地上で高石垣などその痕跡を探すことはほとんど困難な状況にあるからである。しかし、伏見桃山城天守が元の場所を違えて復原され、伏見の町からその天守を遠望できることによって誤解を与えていることは否めない。伏見の桃山は伏見山・木幡山とよばれていたのが、伏見城廃城後に桃や梅の木が群生し江戸時代中期になって桃の花見でにぎあうようになり名付けられた地名[(1)]であって、豊臣秀吉期を桃山時代や桃山文化というよび方はすべきではなく、伏見時代や伏見文化という方が正しいよび方であろう。現在の桃山（伏見山）は桓武天皇陵・明治天皇陵・昭憲皇太后陵が築かれ、鬱蒼とした森を形成している。３基の御陵によって伏見城の城郭中心部は開発からまぬがれ、そして保存されているともいえよう。そのかわりに宮内庁管轄により一般市民の立ち入りはゆるされていないため、踏査も不可能である。桓武天皇陵は明治13年に比定されているが、場所の特定は疑問視されている。また西麓は戦後遊園地となり、昭和39年に伏見桃山城天守が鉄筋コンクリートで復原された。その位置は伏見城復原図（図15）によれば本丸北西部の御花畑山荘のあたりである。そして、桃山の西側に広がる町屋は江戸時代以降現代まで伏見の町として栄えてきた。伏見の造り酒屋および民家の密集した景観を呈し、

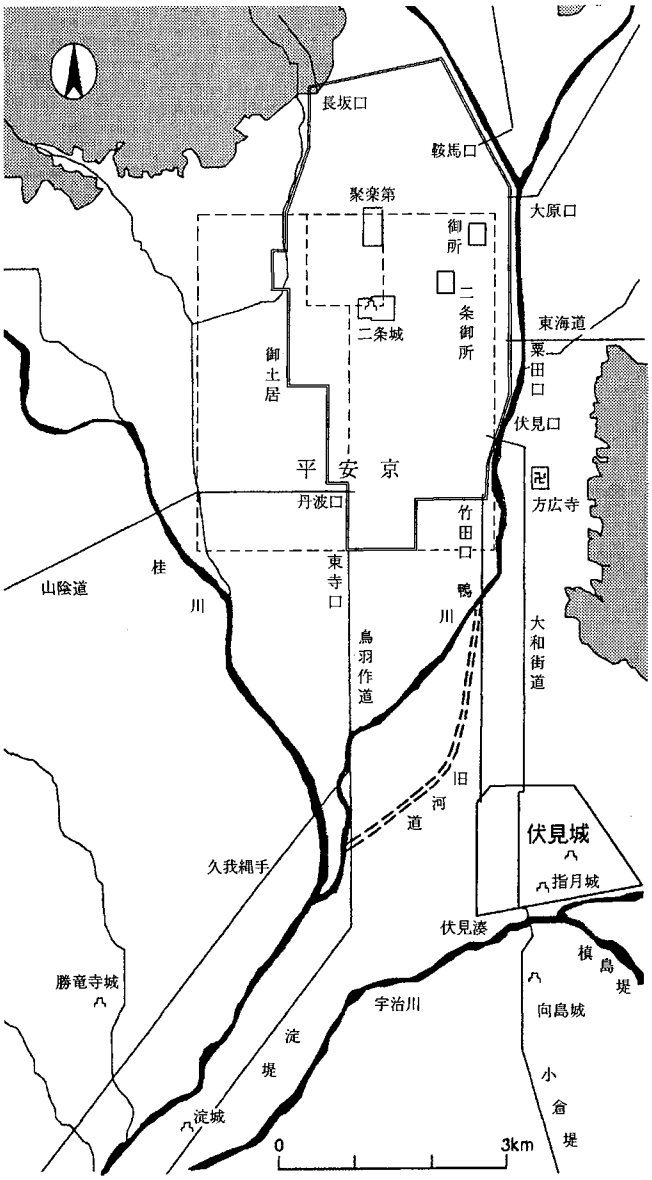


図１　遺跡の位置

今では京都の町屋も変貌しつつあるが、伏見の方が古い町屋の景観を残しているかも知れない。

伏見城の復原については先学の研究[2]が数々あり、また研究会[3]も開催されている。近年発掘調査の進展に伴い新資料も増加してきておりここに紹介してみたい。

2．伏見城の沿革

平安時代後期には眺望を生かした橘俊綱の伏見山荘が建てられた。橘俊綱は藤原頼通の三男で『作庭記』の作者ともいわれ、造園にくわしく白河上皇に自邸の伏見亭を石田殿や高陽院と並ぶ名園と披露[4]している。それは、伏見亭が眺望に優れていたためと思われ、古くは指月の森、現在は桃山町泰長老の辺りと推定されている。その跡が中世には皇室の伏見殿となり、特に後白河法皇の行幸が度々行われている。室町時代には大光明寺が建立された。近世に入り伏見城築城によって、この地域の景観が一変する。天正20年（1592)、豊臣秀吉が伏見指月に隠居所を計画したことから始まる。その隠居所も秀頼の誕生によって本格的な築城へと発展する。文禄３年（1594)には淀城天守と矢倉を移築したり、前田利家に宇治川の改修を命じたり、城下町造成のため社寺村落の移転も行っている。文禄４年（1595）には聚楽第を壊して移築して充実してきた伏見城で

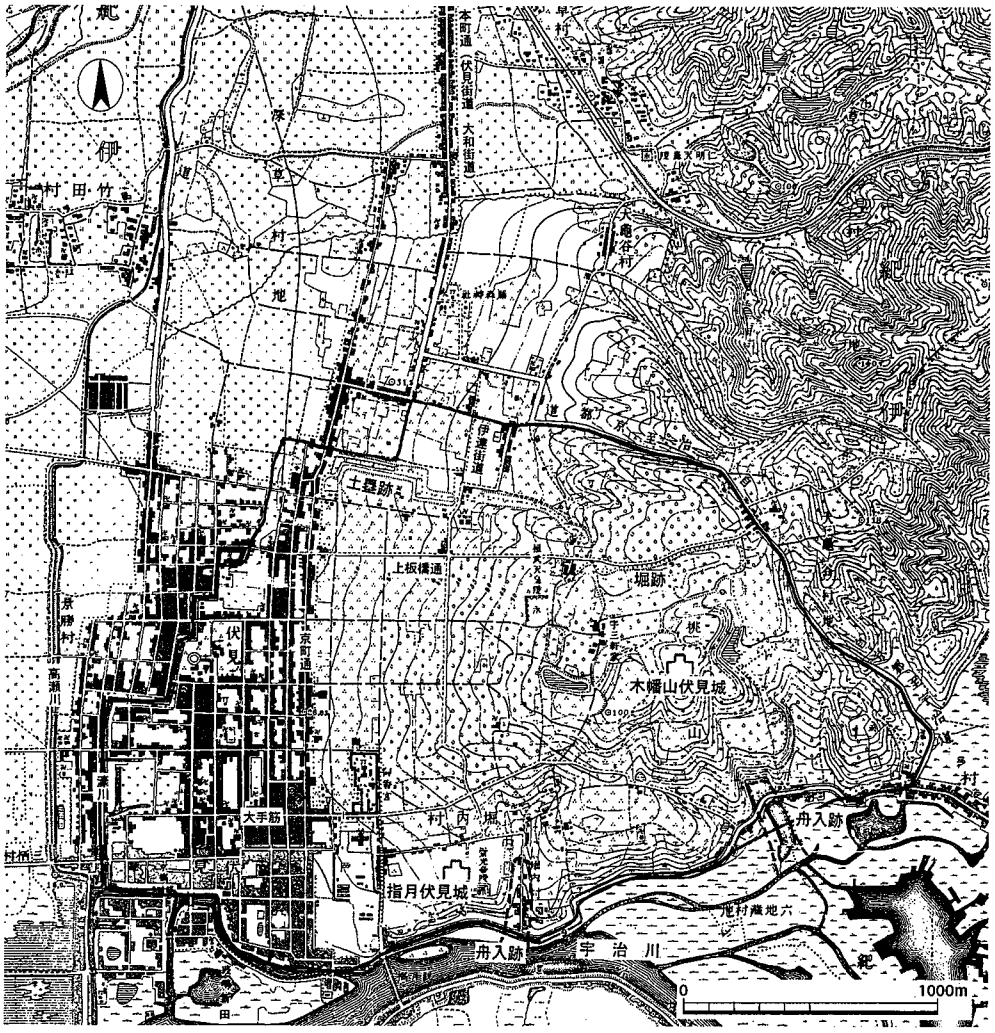


図２　伏見城の位置（明治22年の仮製地図を調整）

あったが、文禄５年（1596）の伏見大地震のため倒壊してしまう。しかし、翌日には指月伏見城より北東の山上に新城（木幡山伏見城）の縄張りにかかり、翌年慶長２年（1597）には完成し、秀頼とともに大坂城から移る。その伏見城も慶長３年（1598）豊臣秀吉の死去によってさらに変貌する。慶長５年（1600）関ヶ原の戦いの前哨戦として伏見城が西軍に攻められ、守ってきた鳥井元忠の自害により堅固な伏見城もついに陥落炎上した。関ヶ原の戦いで勝利した家康と秀忠は伏見城に入城しすぐに普請が始まる。家康は慶長８年（1603）に伏見城で征夷大将軍の宣旨を受けている。そして、修理は慶長11年まで続き、秀忠と家光の将軍宣下も伏見城で受け、元和５年（1620）には一国一城令による伏見城の破却が決まりついに廃城となる。したがって、おおまかにみると指月伏見城・木幡山伏見城・家康の伏見城という３期[(5)]にわたって築城されたことになる。

３．発掘調査の成果

発掘調査は伏見城研究会・京都府教育委員会・（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター・（財）京都市埋蔵文化財研究所などで実施されている。各調査区で道路遺構・建物跡・門跡・町屋跡、また金箔瓦の出土など、それぞれ特色ある成果がみられる。部分的には伏見城廃城時や後世の撹乱を受けてはいるものの、武家屋敷や町屋では比較的良好に遺存していると思われる。屋敷名の特定は今後の課題であるが、道路や区画に関しては古絵図[(6)]と発掘調査の成果はほぼ一致しているとみてよいであろう。

古絵図や発掘調査の成果をみると、天守を中心とし堀に囲まれた城郭区域、城郭を取り巻くように配置された武家屋敷区域、京町通より西側に展開する町屋区域に分けることができ、各区域ごとに検出された主な遺構を取り上げる。

【城郭区域】

城郭中心部は御陵にあたっているため調査できていないが、城郭北堀で調査が実施されている。明治41年に陸軍第16師団が深草に設置されたが、北堀が軍用の貯水池となった。貯水池はその後昭和13年に京都市に移管されて昭和52年に廃止された。No. 2（桃山町大蔵）は北堀公園整備工事に伴う調査で、堀の石垣が長さ40m高さ３～４mの規模で検出された。石垣は花崗岩の自然石を用いているが、基礎地業は強固ではなく、高石垣とはいえない。堀の法面に張り付けただけの状態である。現在は埋め戻されて土盛りを行い、石垣部分を植え込みで表現している。

【武家屋敷区域】

武家屋敷区域は東部・西部・南部とも、それぞれ成果が上がっている。まず、伏見城東麓に位置するNo. 1（桃山町紅雪）は1977年に宅地造成中、偶然に石垣が発見された。石垣は延長41mにわたり、高さが0.8mから1.2mで石が２段分残っていた。石垣には３種類の墨書が確認されている。写真撮影と写真測量の後、その一部が桃山東小学校に移築され、京都市の登録史跡に指定されて現在でも見ることのできる唯一の石垣遺構である。

西部地区では北からみると、上板橋通りに面したNo. 3（桃山町永井久太郎）では礎石建物・

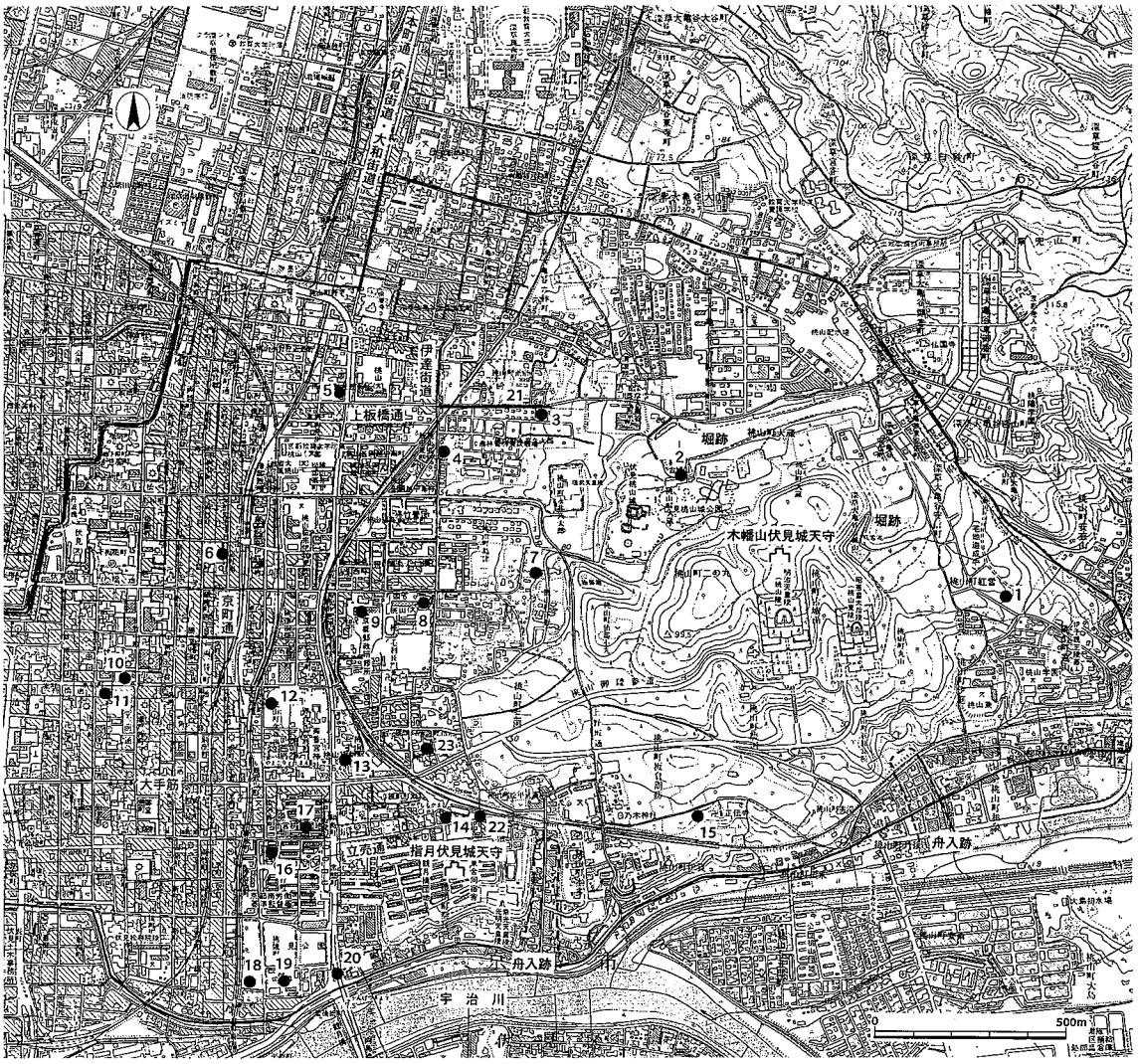


図３　調査位置図（調査地点の番号は表１の番号と一致）

礎石の根固め・井戸・溝と厚さ４ｍに及ぶ大規模な整地層を検出している。

上板橋通りと直交して南北に通る伊達街道に面したNo. 4では、伊達街道の路面と石組みの側溝・礎石建物が検出され、２回の火災を受けていることが判明した。伏見城の大火の回数は７回を確認できるが、どの火災に相当するかは特定できていない。建物跡は北から東へ２度、道路に沿う石垣は東へ３度の振れをもつ。No. 3は松平伊予守屋敷、No. 4は山内土佐守屋敷と推定されている。No.21は上板橋通りの拡張工事に伴う調査で、路面・石組み側溝・石垣を約300ｍにわたって検出した。石垣と側溝は２時期が認められる。南側の武家屋敷へ入る門へ続く石垣の切れ目も見つかっている。

毛利安芸守屋敷と毛利下屋敷に推定されているNo. 8（桃山毛利長門東町）No. 9（桃山毛利長門西町）では面積も広く成果の多い地点である。礎石建物・石組み溝・柵列・築地・井戸などや金箔瓦も多数出土している。No. 8で検出された建物跡（ＳＢ01）は北から東へ５度、ＳＢ02は東へ７度の傾きを持つ。No. 8では地山層が東から西へ傾斜し、西側では最大２ｍの整地層がみられる。No. 9ではⅠ期（下層）の礎石建物（ＳＢ003）はNo. 8と異なり西へ10度の傾きで、Ⅱ

表１　主要遺構検出地点

番号	調査地・町名	主な遺構遺物	調査年	推　定　地	文　献
1	桃山町紅雪	石垣	1977	武家屋敷	『京都市の文化財　第２集』京都市文化観光局　1985年（京都市登録史跡）
2	桃山町大蔵	堀の石垣	1988	北側外堀	『伏見城跡発掘調査報告』伏見城研究会　1989年
3	桃山町永井久太郎	礎石建物・井戸・溝・土壙	1986	松平伊予守屋敷	「伏見城跡」『昭和61年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1989年
4	桃山町永井久太郎	伊達街道路面・石組み側溝・礎石建物・築地	1988	山内土佐守屋敷	「伏見城跡」『京都市内遺跡試掘立会調査概報』京都市文化観光局 1989年
5	水野左近東町	土壙・整地層・金箔瓦	1977	武家屋敷	『伏見城跡発掘調査概報』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1977年
6	京町・両替町	京町通路面と側溝・礎石建物・塀・溝・土壙	1988	町屋	「伏見城跡２」『昭和63年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1993年
7	桃山町下野	石垣・石組み（庭園）	1995	松平下野守屋敷	「伏見城跡No.68」『京都市内遺跡試掘調査概報』京都市文化市民局 1996年
8	桃山毛利長門東町	石組み溝・礎石建物・柵列・金箔瓦	1980 1983 1994	毛利安芸守屋敷	「伏見城跡発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報1980-1』京都府教育委員会　1980　「伏見城跡発掘調査概報」『京都府遺跡調査概報第８冊・第44冊』（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター　1983年・1994年
9	桃山毛利長門西町	礎石建物・井戸・築地・金箔瓦	1990	毛利下屋敷	「伏見城跡発掘調査概報」『京都府遺跡調査概報第44冊』（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター　1991年
10	今町	掘立柱建物・井戸・土壙・柵列・木簡（付け札）	1986	町屋	「伏見城々下町」『昭和61年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1989年
11	東組町	大土壙・溝・井戸・木簡（付け札）	1985	町屋	「伏見城跡１」『昭和60年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1988年
12	桃山町金森出雲	門跡・井戸・溝・土壙・木簡「中将御覧」・金箔瓦	1985	金森出雲屋敷	「伏見城跡２」『昭和60年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1988年
13	桃山町松平筑前	掘立柱建物・礎石建物・柵列・井戸	1989	榊原遠江守・肥前中納言・榊原式部太夫屋敷	「伏見城跡」『平成元年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1994年　「伏見城跡」『平成９年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1999年
14	桃山町立売	築地塀・礎石建物・井戸・土壙・違い鷹文軒瓦	1987	浅野但馬守屋敷・立売	「伏見城々下町」『昭和62年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1991年
15	桃山町伊賀	堀状遺構・溝・礎石建物・柵列・金箔瓦	1982	武家屋敷	「伏見城跡（1）」『昭和57年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1984年
16	西奉行町	門跡・池・土壙・金箔瓦	1988	富田信濃守屋敷・伏見奉行所	『伏見奉行所発掘調査報告』京都市住宅局　伏見城研究会　1990年
17	片桐町	掘立柱建物・同心屋敷・水琴窟	1991	富田信濃守屋敷・伏見奉行所	『伏見奉行所発掘調査報告Ⅱ』京都市住宅局　伏見城研究会　1997年
18	桃陵町	掘立柱建物・土壙・溝・土取り穴・金箔瓦	1988	山口駿河守屋敷	「伏見城跡３」『昭和63年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1993年
19	桃陵町	池状遺構	1975	山口駿河守屋敷	『伏見城武家屋敷跡発掘調査報告』大阪経済法科大学　1976年
20	豊後橋町	路面・石積み・瓦溜め	1974	道路敷	『伏見城豊後橋北詰の調査』伏見城研究会　1975年
21	桃山町永井久太郎	上板橋通・伊達街道、路面・石組み側溝・石垣	1999	道路敷	「伏見城跡」『平成10年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所　2000年
22	桃山町立売	立売通路面・側溝・町屋	1999	浅野但馬守屋敷・立売	現地説明会資料
23	桃山筑前台町	金箔瓦多量	1999	前田利家邸	「伏見城跡」『京都市内遺跡立会調査概報平成11年度』京都市文化市民局 2000年

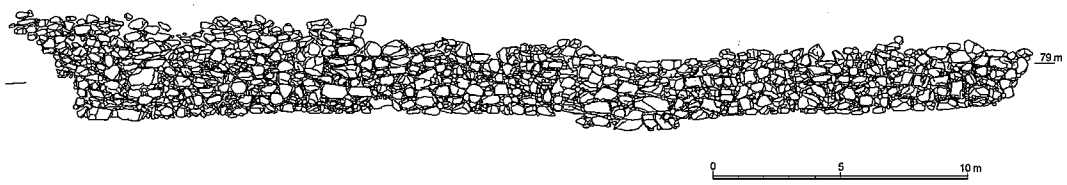


図４　No. 2（桃山町大蔵）石垣立面図（図４～13は表１の文献から転載）

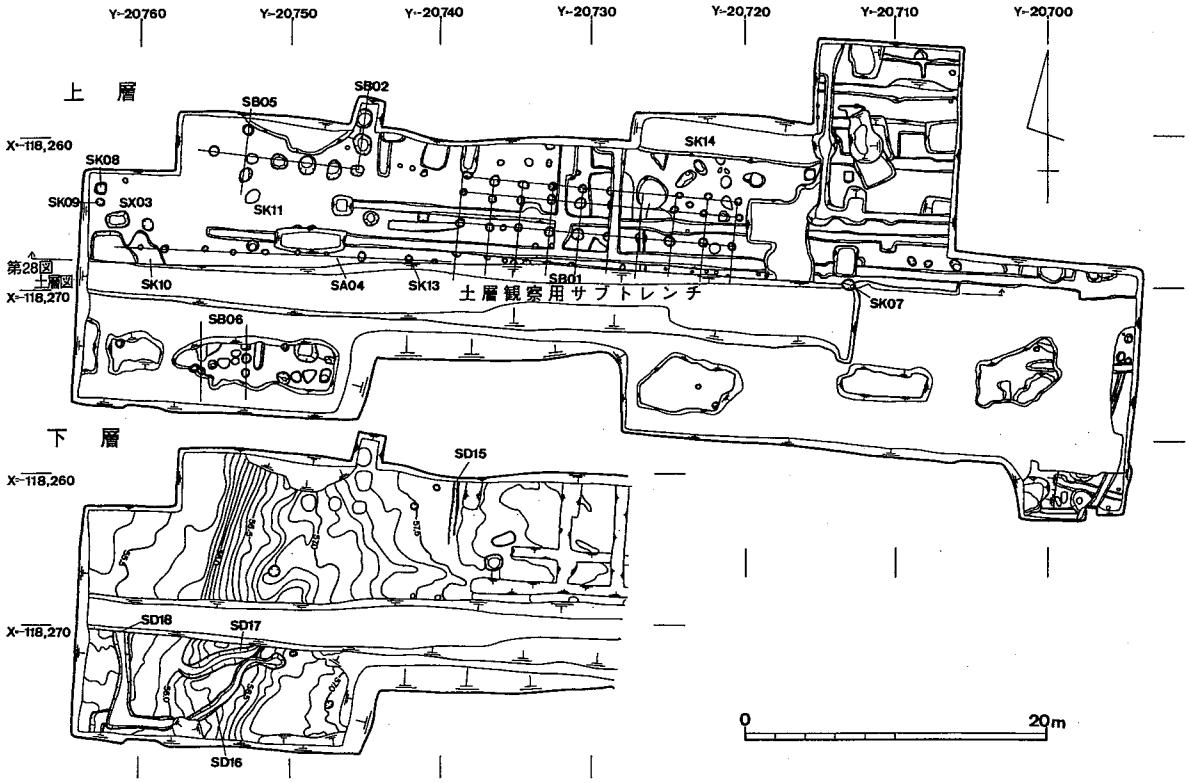


図５　No. 8（桃山毛利長門東町）平面図

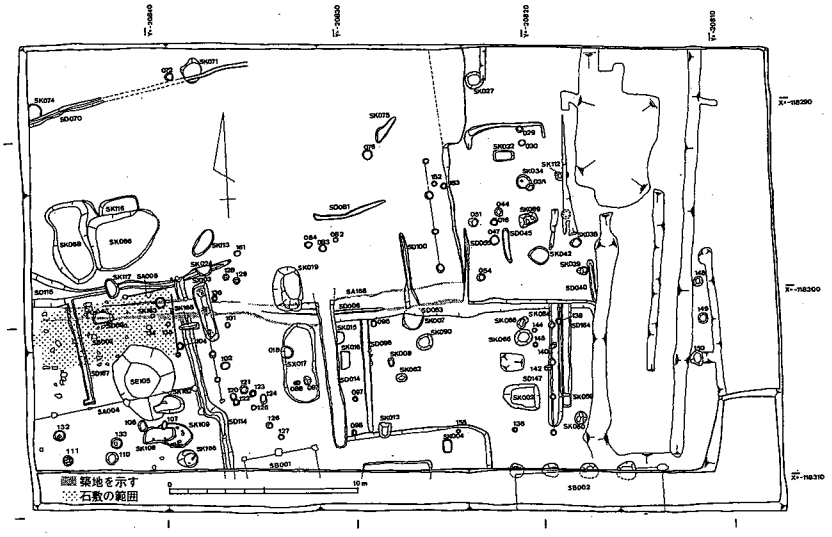


図６　No. 9（桃山毛利長門西町）平面図

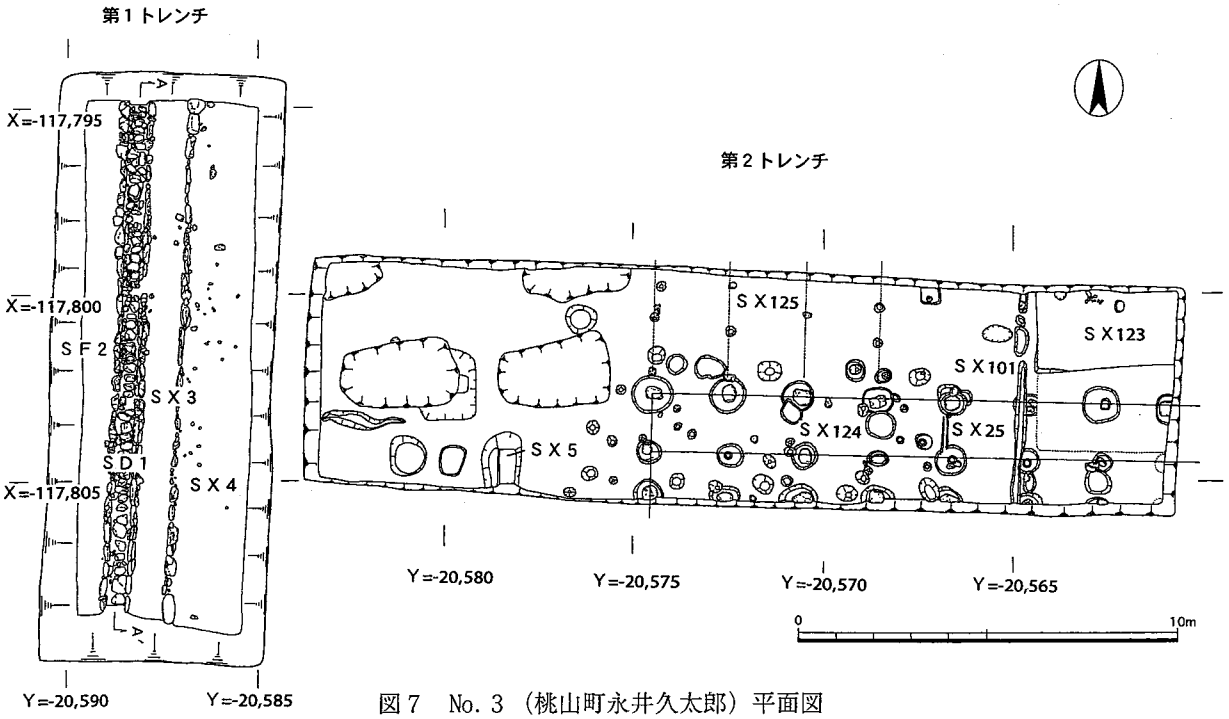
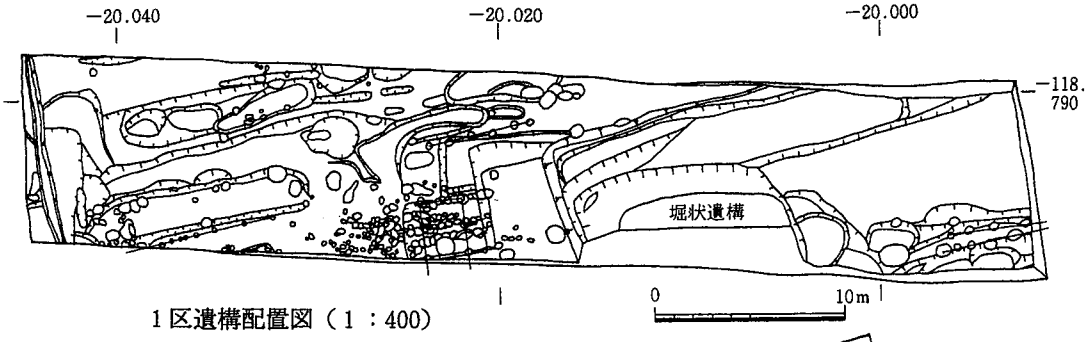
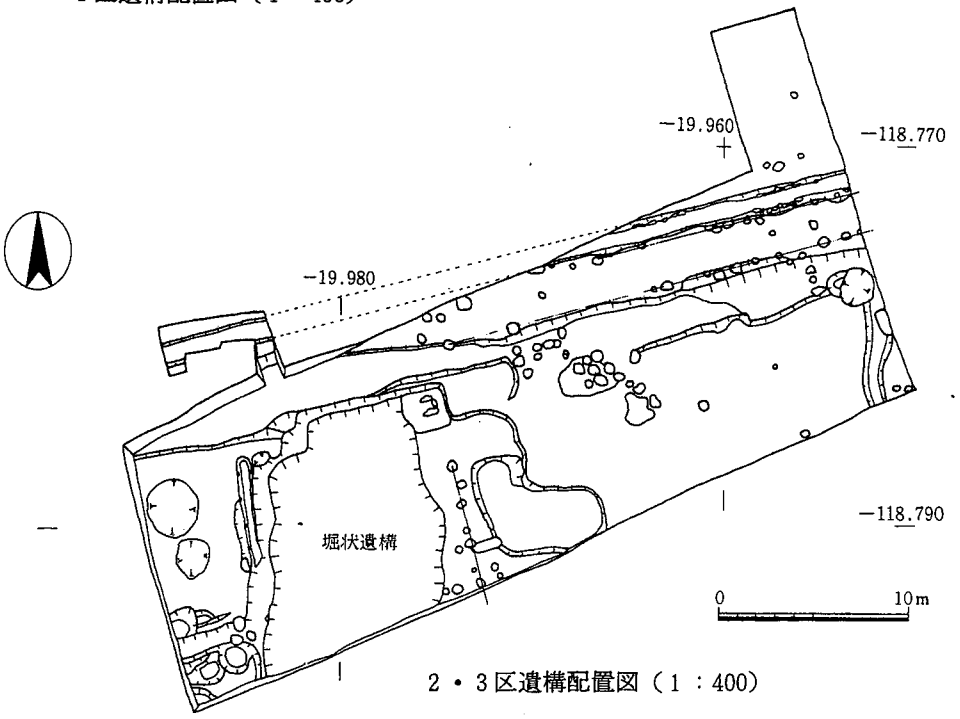


図7　No. 3（桃山町永井久太郎）平面図



1区遺構配置図（1：400）



2・3区遺構配置図（1：400）

図8　No.15（桃山町伊賀）平面図

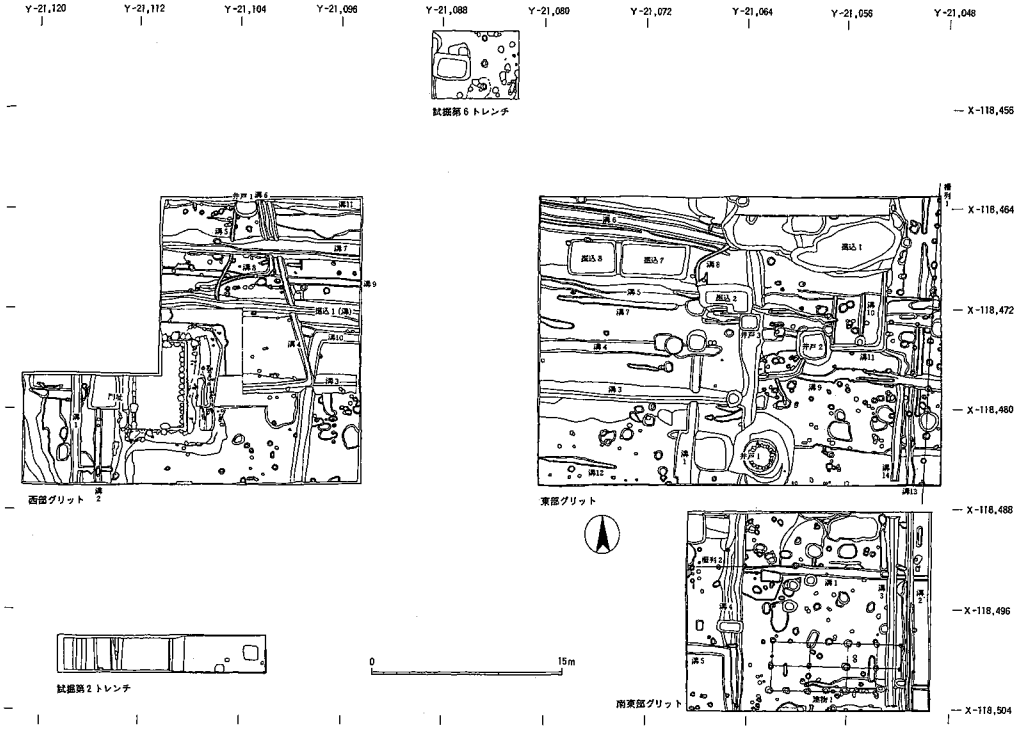


図９　No.12（桃山町金森出雲）平面図

期（上層）のＳＢ002は東へ１度である。

御香宮の西側のNo.12（桃山町金森出雲）では門跡が良好な状態で検出された。門跡は南北道路に西へ面して建てられ、火災を受けていることが明らかである。門の礎石などの施設が完全に残っており、扉を内側へ開く型式である。金森出雲屋敷推定地にあたるが、屋敷本体は伏見城廃城に伴う屋敷移転によって破壊されたものか、建物は明確でない。注目される遺物としては「中将御覧」と記された木簡が出土している。門跡はほぼ真北方向、調査区の東端で検出された柵列は東へ３度の振れを持つ。門跡は厚い整地土層上面に築かれており、また、遺構は焼け瓦を含む焼土層に覆われ、火災を物語っている。

No.13（桃山町松平筑前）では礎石建物・掘立柱建物・柵列・井戸が検出されている。調査区西端で見つかった建物４は、小さな礎石を用い柱間隔も狭いが、主屋と付属建物が明確にわかる。整地層が２面あり、下層の建物４は西へ４度振れ、上層の建物１はほぼ真北方向である。調査区の西側だけ整地層が残存し、東半部は削平されている。この東部では数条の柵列が見られ、西へ振れるものと真北方向のものがある。概報では下層の整地層を豊臣期の、上層の整地層を徳川期と報告している。

伏見城下の東側で実施された数少ない調査で成果の上がっているNo.15（桃山町伊賀）では、大規模な堀と多量の金箔瓦が出土し、武家屋敷の一角であることが明確にわかる。概報ではＡ期とＢ期の２期が確認され、Ａ期を関ヶ原以前（豊臣期）、Ｂ期を関ヶ原以後（徳川期）想定している。Ａ期の柵列や溝は西に14度、Ｂ期は西８度の方向であり、Ａ期Ｂ期で変化しているものの地形に合わせた方向といえよう。

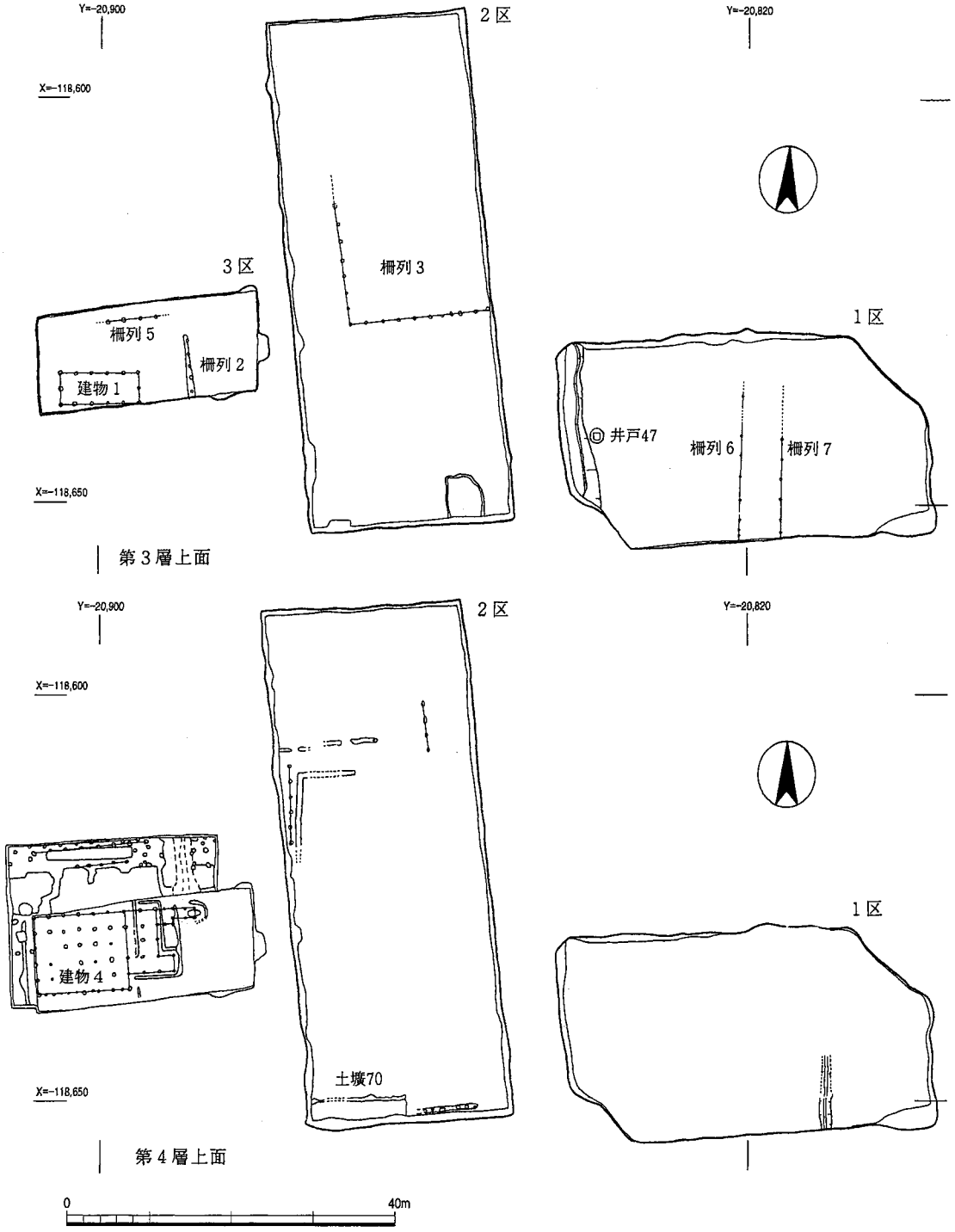


図10　No.13（桃山町松平筑前）平面図

No.16（西奉行町）No.17（片桐町）は桃山時代に富田信濃守屋敷、江戸時代は伏見奉行所として利用され明治維新まで続いた。奉行所は造園家で有名な小堀遠州が奉行として、この地へ移転してきて長期間をかけて造営した。No.16では小規模な門跡や池があり、池からは金箔瓦を含んだ多量の瓦が出土している。No.17では江戸時代後期の同心屋敷が良好に遺存している。屋敷の区画が良くわかり、建物に伴ってそれぞれに蹲踞と水琴窟が設けられている。

No.18（桃陵町）は山口駿河守屋敷と推定され、掘立柱建物・溝・大土壙が検出され、多数の

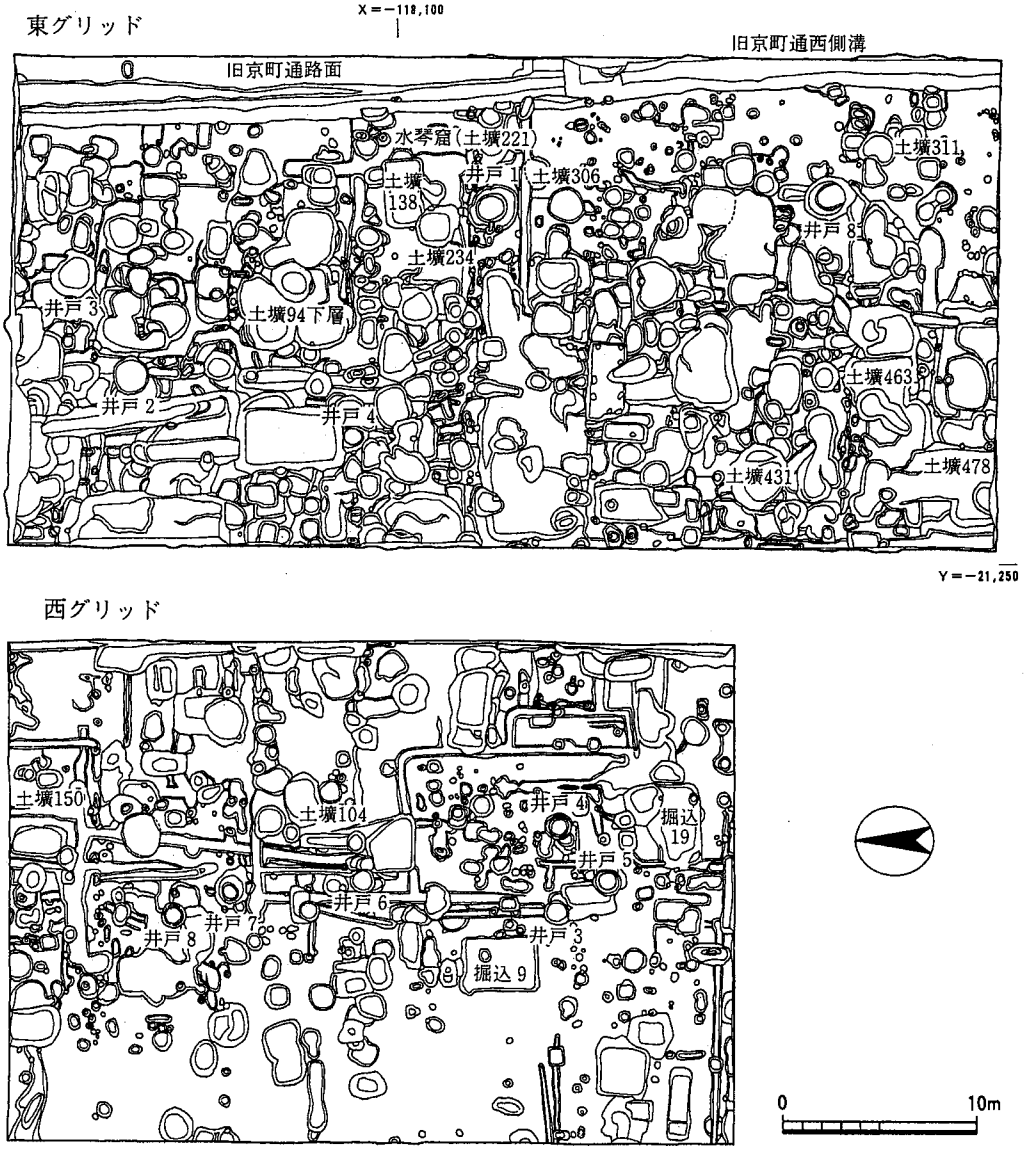


図11　No. 6（京町・両替町）平面図

金箔瓦も出土している。大土壙は大規模に土を採取した後、ゴミ捨て穴として利用したと考えられている。

No.23（桃山筑前台町）は住宅建築に伴う立会調査で、前田利家邸に想定される地点にあたり、多量の金箔瓦が出土した。また、No.13地点の南側で大手筋に沿った桃山町松平筑前の住宅建築に伴う立会調査[7]においても、まとまった金箔瓦が出土している。

昭和58年に実施された道路上の立会調査[8]では、桃山井伊掃部町では石組み溝、桃山福島太夫南町で素掘の溝が検出され、成果を得ている。平成元年には指月城推定地及びその周辺の道路で立会調査[9]が行われ、石垣の基底部や金箔瓦の出土が見られた。指月城の遺構は削平されたものか検出されていない。

【町屋区域】

城下町の西部にあたるNo. 6（京町・両替町）No.10（今町）No.11（東組町）は町屋が展開し

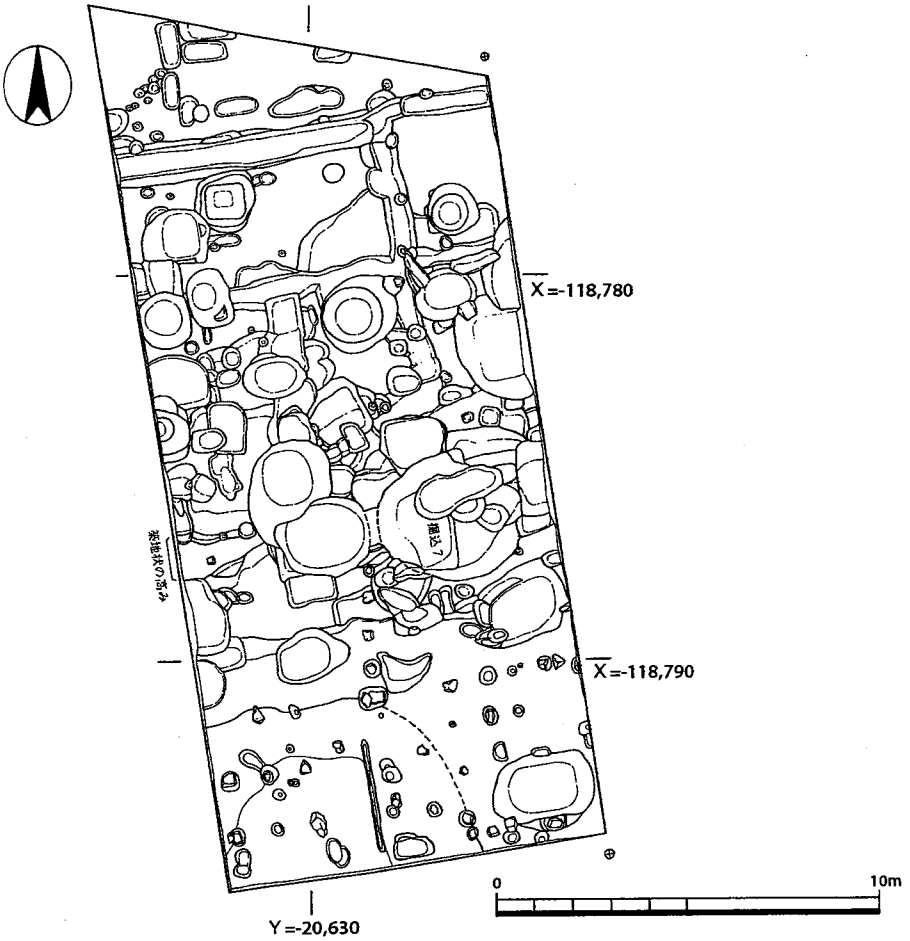


図12　No.14（桃山町立売）平面図

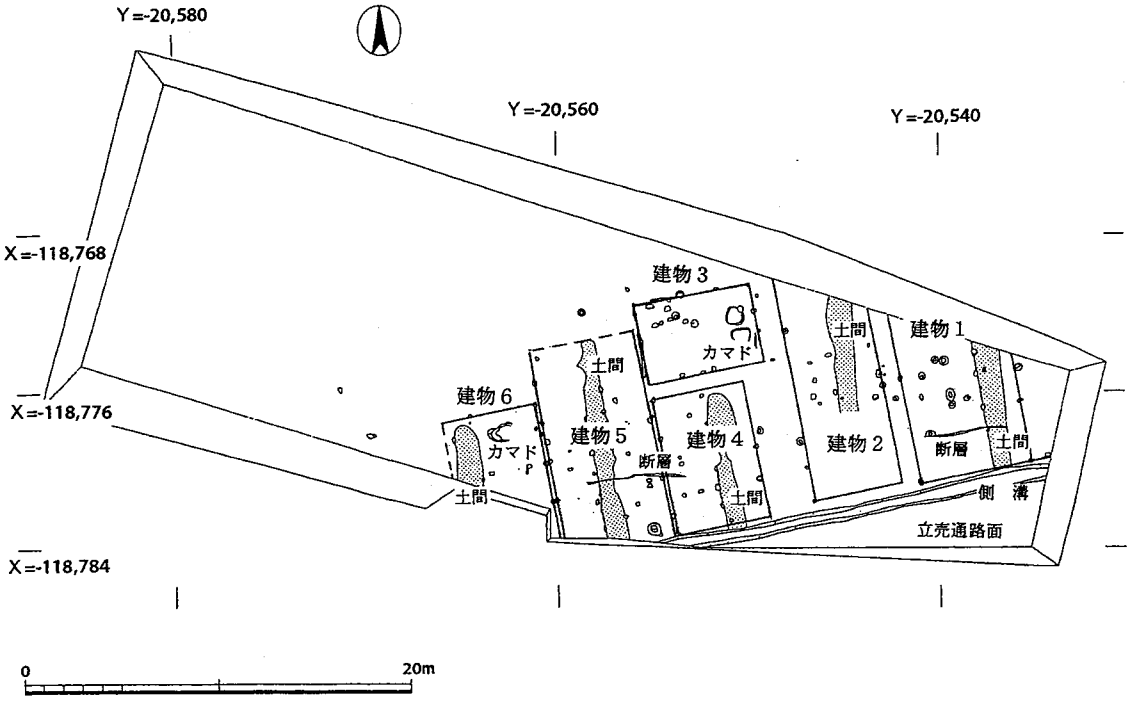


図13　No.22（桃山町立売）平面図

図14　豊公伏見城図（伏見町誌より）

ていたらしく、武家屋敷推定地と比較して遺構・遺物の様相が完全に異なる。桃山時代から現代まで町屋として延々と続いてきたようで、建物・井戸・柵列・土壙などが重複して検出される。また陶磁器・土師器などの土器類、漆器・箸・下駄などの木製品、文字の書かれた付け札などが出土している。No. 6の京町通側溝は西へ2度の傾きがある。No. 11（東組町）では一辺が8～10m深さ4mの大土壙があり注目される。

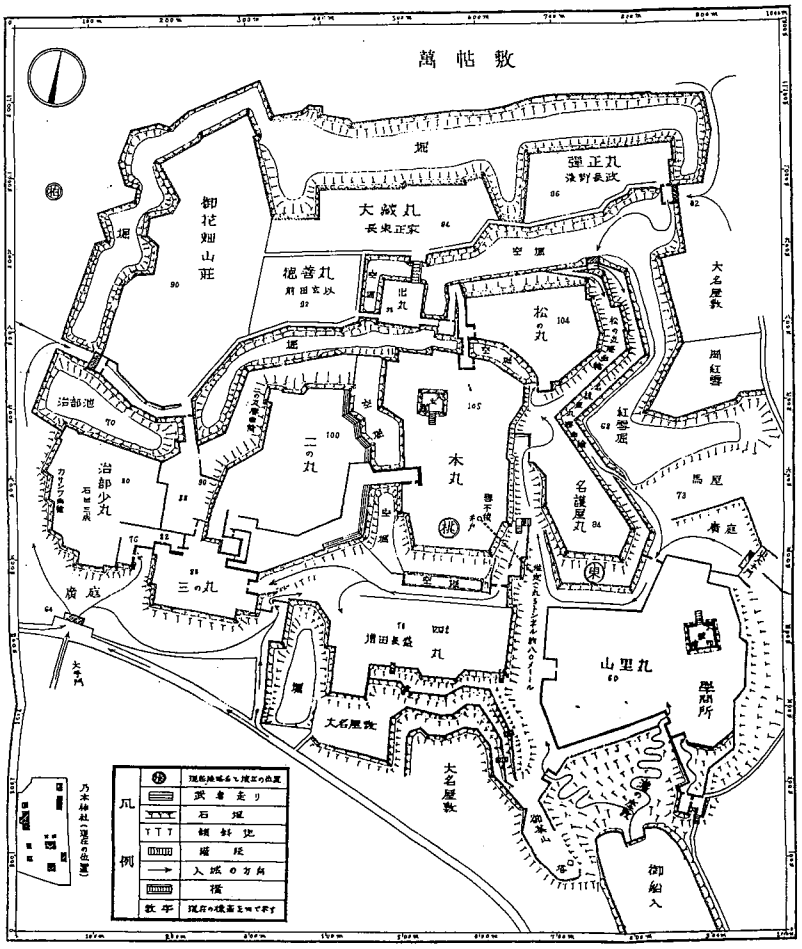


図15　城郭復原図（加藤次郎『伏見桃山の文化史』による）

No. 14とNo. 22（桃山町立売）は立売通に面しており、調査区南半に立売の建物らしい礎石建物が検出された。立売の北側は浅野但馬守屋敷と推定され、調査区からは浅野家の家紋である違鷹羽文軒瓦が出土している。No. 14では建物跡が焼土層を挟んで2時期があり、火災に合い建て替えられたものである。No. 22では立売通の路面と側溝が検出され、道路に面して町屋跡が並んでいることが判明した。町屋跡は小さい礎石を用いた建物で土間と床張りが認められ、カマドも付設している。建物はNo. 14と同様火災を受けており、地震による地割れも検出した。火災は慶長10年（1605）の立売町の大火によると思われ、地震の地割れは層序の関係から寛文2年（1662）の地震に相当すると思われる。建物の後ろは井戸やゴミ穴などが掘られている。町屋跡は立売通りに面して妻側を揃えて建ち並び、No. 14の町屋跡も同じく北に対して西へ11度の傾きをもつ。

4．まとめ

城郭区域は木幡山頂上に天守を築いた本丸を中心として内堀と外堀をめぐらし、西丸・三ノ丸・治部丸・名古屋丸・松丸・太鼓丸・弾正丸などの施設が配される。本丸の東・北・西は内堀と外堀で囲み、南側は急峻な崖面で防御する。また、宇治川の河道を槙島堤によって伏見城の南側へ接近させ、山科川と宇治川によって堀の役目をさせるという大土木工事を行い、堅牢な城郭だったのである。秀吉最後の築城であり、さぞ絢爛豪華な城だったことと思われる。しかし、文

禄慶長の役の真最中であり、各大名にとっては大きな負担を強いられたことであろう。

その城郭の東・南・西に武家屋敷が展開する。明治22年の仮製地図（図２）をみると、最後の徳川期造営を残すと思われるが、城郭西側の城下は整然とした地区割りが認められるに対して、城下の東側と南側には武家屋敷の縄張りの痕跡を探すのは困難である。おそらく、東側と南側は地形を重視した縄張りとなっているのである。城郭部分も当然旧地形を利用して、堀や土塁を築いているわけで、城下の北側に築かれた惣構の土塁をみても斜め方向に一直線に延びている。また、土塁の南側、城下西半部の武家屋敷と町屋は正方位に近い町割りで整然と区画されているのに対して、土塁より北側に展開する町割りは土塁と並行し同じように北から東へ大きく傾き、北へ700m上がるとまた正方位に近くなる。土塁とこの町割りの方位は伏見城の築城以前からある木幡関から深草への旧道を利用した縄張りと思われる。次に、正方位の町割りに合わない道路として、大手筋東部とその南側に平行している立売通りがある。北側の土塁の方向に反して今度は北に対して西へ傾く方位を持つ。立売通りの南側が指月の森で、ここに最初の指月伏見城の天守が想定されている。そうすると指月伏見城に隣接した立売通りと大手筋は豊臣期当初の町割りの方位を残していると考えることが可能である。

発掘調査で検出された造営時の整地層や地割に関係する遺構の方位を検討することによって、各造営期の縄張りを考える材料となる。また、遺構に伴った出土遺物ももちろん重要である。各造営の時期が指月伏見城から徳川期の造営と修理までわずかに十数年という短期間であるため、出土遺物から遺構の時期を各造営期に当てはめることは現段階では困難な作業である。しかし、各地の城の調査例も増加し、細かな編年も確立されつつある。

No. 9（桃山毛利長門西町）では焼土層を境にして整地層が２層認められている。下層をⅠ期、上層をⅡ期とし、Ⅰ期の礎石建物ＳＢ003は北から西へ10度、Ⅱ期のＳＢ002は東へ１度という傾きがある。Ⅰ期とⅡ期で地割りの変更があったとみられ、概報ではⅠ期を豊臣期、Ⅱ期を徳川期と想定されている。Ⅱ期の建物は明治の仮製地図でみられる町割りと平行している。また、No. 8（桃山毛利長門東町）では大規模な整地が行われ、その上面から検出された建物跡ＳＢ01が東へ５度、ＳＢ02が東へ７度という振れを持つ。No. 8とNo. 9は方向の異なる建物の振れがある。

No.13（桃山町松平筑前）でも整地層が２層認められ、各整地層の上面で遺構が検出されている。そして、下層の建物は西へ４度、上層はほぼ真北方向であり、No. 9と類似し、ここでも地割りの変更が考えられる。下層の建物の方向は、敷地の南にある大手筋と平行し、上層は大手筋の北側に展開する武家屋敷の町割りに沿っている。

No. 3（桃山町永井久太郎）の通称伊達街道の路面と側溝及び武家屋敷内の礎石建物は、正方位に近い傾きである。No.21の伊達街道と直交する通称上板橋通りもNo. 3と同様である。但し、道路側溝に一部造り替えがみられる。

町屋区域では重複が激しいため建物を復原することは困難であるが、立売通りに面した調査No.14とNo.22で良好に礎石が遺存しており、西へ11度の振れがあることがわかる。道路側溝は素掘で調査の範囲が短いが、建物と同じ向きである。他の町屋部分ではNo. 6（京町・両替町）で

検出した京町通りの側溝があり、西へ２度の傾きを持つ。

以上のことを総合すると、城下の西半部では仮製地図で確認できる地割りに沿った遺構とその下層では方位の異なる遺構が存在する。正方位に近い地割りとその下層はいつの時期の造営かが問題となる。現在も造営最終の町割りが踏襲され、伏見の町を形成しているわけであるが、豊後橋から京町通り大和街道という交通網や伏見湊の造営といった流通のことを考え合わせると、いかにもこの町割りは豊臣秀吉の造営と思われる。文禄３年（1594）に城下町造成のため寺社村落の移動や槙島堤による宇治川の付け替えという土木工事を行っている。この時に地形に合った城郭と地割りを実施し、また、木幡山の堀や土塁の工事も文禄３年の段階で開始されていたのではなかろうか。堀や船入りの土を槙島堤に用いた可能性を考えたい。そして、慶長の大地震後木幡山の頂上に天守を移したのに合わせ、指月伏見城当初の地形に沿った地割りを正方位に変更して、京町通りに沿った町屋や武家屋敷を再整備したのではなかろうか。また、正方位に近い地割りは紀伊郡の条里制が影響していることは明らかである。大手筋の東半部と立売通はそのまま利用されたのであろう。No.22で検出された路面を見ると同じ位置に何回も礫を積み重ねたことが判明している。徳川期には確かに伏見城の再建や石垣の修築の記事が確認できる。家康・秀忠・家光と三代にわたって伏見城で将軍の宣下を受けているため、城郭の再建と道路の整備を行ったことは十分に考えられるが、二条城・駿府城の造営が行われている時期でもあり、地割りのやり直しまで含めた城下町の再整備は行われてはいないと思われる。

金箔瓦の出土は広範囲にわたっており、また家紋瓦の問題など、出土瓦からみた武家屋敷の検討はまだまだ未整理で今後の資料増加が期待される。

註・参考文献

（1） 伏見区『京都市の地名』日本歴史地名大系第27巻　平凡社　1979年

（2） a　『京都府伏見町誌』伏見町役場　1929年

b　加藤次郎『伏見桃山の文化史』　1953年

c　中島至『伏見城とその城下町の変遷』若林春和堂　1963年

d　黒川直則・野田只夫「伏見城と城下町」『京都の歴史』　1969年

e　内藤昌・大野耕嗣・高橋宏之「伏見城Ⅰ・Ⅱ」日本建築学会論文報告集181号・182号　1971年

f　足利健亮他「宇治川の治水」『宇治市史２』　1974年

g　三木善則・高島勲・星野猷二『伏見城』伏見城研究会　日本古城友の会　1978年

h　足利健亮『中近世都市の歴史地理』地人書房　1984年

i　森島康雄「伏見城発掘調査成果の基礎的整理」『織豊城郭４号』織豊期城郭研究会　1997年

森島康雄「伏見城城下町の成立過程」『国家形成期の考古学』大阪大学考古学研究室　1999年

（3） 第８回平安京･京都研究集会「天下人の首都・伏見」が1998年２月に開催され、伏見城の復原が発表された。

（4） ふしみの雪の朝『今鏡』「新訂増補国史大系21下」

（5） 築城過程については3期説（桜井成広）、4期説（内藤昌）、6期説（城戸久）など各説がある。

（6） 伏見城の古絵図には、『伏見町誌』所収（図14）の「豊公伏見城図」、中井家所蔵の絵「伏見古城図」や伏見桃山城キャッスルランド所蔵の「伏見古城絵図」などがある。伏見桃山城キャッスルランド所蔵の図は中井家所蔵に類似し、写しの可能性がある。

（7）「伏見城跡」『京都市内遺跡立会調査概報平成5年度』京都市文化観光局　1994年

（8）「伏見城跡（1）（2）」『昭和58年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1985年

（9）「伏見城跡」『平成元年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1994年